

第2回合同ワーキンググループの主な意見

日時：平成21年3月4日（火）13：30～16：00

場所：はあといん乃木坂

○中間処理及び処理産物に関する議論

- ・ 破碎、解砕等の中間処理で得られる産物に関し、組成の情報とともに、産物の状態に関する情報も、その後続くプロセスを考える上で重要である。
- ・ 中間処理のコンセプトあるいは目的を明確にしておく必要がある。（レア金属の濃縮、含有部品の分離 等々）
- ・ レア金属以外の鉄、アルミ、樹脂などの副産物の、適切な処理やリサイクルの方法・ルートについての配慮が必要である。
- ・ 液晶からインジウムを回収した後に残るガラスのように、レア金属回収後の産物の用途開発の必要性についても議論することが重要である。

○既存のレア金属回収システム（非鉄製錬）に関する議論

- ・ 既存のレア金属回収システムの、レア金属回収に対応可能な範囲は明確にしておくことが重要である。
- ・ 現在回収されていないレア金属については、技術・プロセスの検討が必要であり、その場合には残渣の処理、副産物の処理も含めて検討することが重要である。
- ・ 資源に着目したレア金属の種類や含有量を把握するだけでなく、適切な管理が必要な物質に関しても、既存技術やフローで対応できなければ、新たな選択肢の模索やプロセスの結合による全体システム構築について議論を進める必要がある。

○分析方法及び含有成分データを受けての議論

- ・ 分析データは、分析方法や試料調整方法等の条件とともに精査した上で、過去のデータと照合し検証する必要がある。（ACアダプターでの臭素含有量、溶出試験による鉛の値等の分析データ）
- ・ 分析結果の数値については、測定の有無等の確認のために分析限界値以下という結果についても正確に記述することが必要である。
- ・ 溶出試験においては、ろ過方法でガラス繊維を使うと微細な金属が漏れてくる可能性がある等、分析手法についても確認が必要である。

○レア金属回収の課題に関する議論

- ・ 資源ポテンシャルの把握では、静脈側の情報取得は困難ではあるものの、科学的なデータが必要であり、可能な限り定量的な議論を進めていくべきである。
- ・ 使用済小型家電のレア金属回収については、マテフロの明確化等において生産側の協力も必要であると表現とすべきではないか。
- ・ リサイクルの現状では、希土類が既存の非鉄製錬においては回収不能となるなどの、現実についても正しく記述すべきではないか。

○環境管理に関する議論

- ・レアメタルだけに着目するのではなく、処理残渣に例えば臭素高含有樹脂が含まれているような場合、その後の処理・リサイクルによって、有害物質の拡散の可能性を議論する必要があり、またプロセス副生成物が既存の廃棄物処理プロセスと繋がらないリスクも考える必要がある。
- ・シナリオにおいては、End of Pipeの観点から残渣の流れも考慮する必要があり、それも含めて残渣のリサイクル、廃棄物管理を含めるべきではないか。
- ・シナリオにおいて、現時点では破碎・選別の前に、“手解体”等を入れておく必要があるのではないか。
- ・日本と海外では環境管理や規制の考え方に差異がある。フローの考え方、シナリオ、イベントの考え方に関しては、海外動向にも注意を払うべきである。
- ・有害物質管理については、環境負荷だけでなく人体への影響としての労働安全に関する情報を含めてトータルリスク管理として同時に考えていく必要がある。
- ・リサイクルプロセスが全く具体化されていない状態ではハザード評価が重要であり、その情報をプロセス選定に活かすべきである。金属粉末の情報だけでなく、生体に対する危険性の高い状態として金属塩、安定状態としての酸化物の情報も必要である。現在ではレアメタルに関してデータが不足している状況と理解しておく必要がある。

○その他

- ・討議事項や、情報については誤解や勘違いを生じないように、正確かつ慎重なる提供・開示をしてもらいたい。また、社会へのアピールの側面があることにも配慮してほしい。
- 以上